
澎湃

麗朱夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

澎湃

【Nコード】

N3912Y

【作者名】

麗朱夜

【あらすじ】

一つの大陸で、二つの陣営がぶつかり合う。人々はその潮流の中に巻き込まれていく。男性主人公、女性主人公、二人の視点から書いていきます。

連合編 第一部 第一章

どこからともなく現れた騎兵の集団が、瞬く間に野営地を騒然とさせた。

馬蹄が鳴り響き、大地が震え、かがり火が倒される。

炎は一瞬のうちに周囲の草へとその触手を伸ばし、辺りは一気に熱気と煙に包まれる。

「敵襲!! 敵襲!!」

見張りの兵士が遅過ぎた叫び声を上げ、貴重な夜の眠りを妨げられた兵士たちが、慌ただしく自分の武器を取り上げる。

しかしながら、彼らが完全な戦闘態勢に入るには、もはや遅きに失っていた。

騎兵の集団は、すでに殺戮を欲しいままにしていたのである。

ある者は剣で切り裂かれ、ある者は槍で突き刺され、ある者は矢で射殺された。

草が燃え上がる臭いに混じり、鮮血の臭いが辺りの空気を満たしていく。

栗毛の馬を駆る騎兵は、逃げ惑う敵兵と遭遇した。

その敵兵は明らかに自分のほうが不利なのにもかかわらず、戦う意思を示した。

剣を構えると、言葉にならない叫び声を上げて突進する。

騎兵も構え、その攻撃を迎え撃った。

一合、二合、三合　と、剣が交えられる。

月光をかき消す程の炎が燃え上がる中で、剣閃が異様な煌きを発し、戦う二人を緊張の極へと誘う。

やがて、騎兵は鎧の中でひやりとしたものを感じ始めた。

自分の技倆が、決して相手を上回らないと悟ったのである。

相手は追い詰められてはいるが、弱兵というわけではなく、確実に自分の剣に応えるのだ。

だが、騎兵は馬首を返してその場から逃げ出すようなことはしたくなかった。

彼らが夜襲を仕掛けた目的は、一人でも多くの敵兵を殺し、敵の士気を削ぐことであつたから。

何度もの剣撃で、手から腕が痺れ始めていた。

しかし、騎兵は狙いを定め、敵兵へと剣を繰り出した。

渾身の一撃と言っても良かったかもしれない。

その一撃を、敵兵は驚くべき力で跳ね返した。

騎兵の手から剣が飛び、勢いよく大地に突き刺さった。

すぐさま、騎兵はもう一本の剣を鞘から抜き放つ。

今度は外さない。外せない。

柄を握る手に力を込める。

もう一度、剣を繰り出そうとしたまさにその時、横から飛んで来た矢が敵兵の首を貫いた。

豪弓であった。

敵兵は、もはや馬上の人ではなくなっていた。

騎兵は冷静さを保ちつつ、矢の飛んで来た方向を一瞥した。

炎の中を縫って、弓と矢を携えた者が現れる。

明らかに弓兵　騎兵の仲間であった。

「勝ったな」

「……ええ、勝ったわ」

騎兵は暑苦しい兜を脱いだ。

兜の中から、長く茶色い髪がこぼれる。

うら若い女性であった。

陶器のように滑らかな白い肌の上を、汗が流れ落ちる。

その汗が熱さによる汗なのか、それとも冷や汗なのか、彼女自身にも分からなかった。

連合編 第一部 第二章

ケーテコツド 彼らが本拠としている街に戻る頃には、既に太陽が顔を出し、その溢れんばかりの光を地上に与え始めているところであった。

ディーナは甲冑や武器といった自分の商売道具から解放されると、あてがわれている宿へ直行し、ベッドに横になった。

心身共に、緊張はまだ解けていなかった。

戦いの後は、名状しがたい快感に浸って戻って来る時もある。

だが、今日はそんな快感は皆無だった。

苦々しさだけを感じる。

目を閉じて、虚心になろうとしても、それは無駄な努力というもののようにであった。

彼女は横を向き、壁を睨み付けるようにして見つめ、しばらくそうしていた。

やがて起き上がり、汗ばんだ服を脱いで、宿で働いている女たちが洗ってくれた服に着替える。

彼女は洗濯をする必要が無い。

それは自分の仕事ではないから。

宿の女たちは、手が荒れてひどいと嘆く。

だが、彼女はそれが無い代わりに、肉刺すくができ、ごっごつした手になっていく。

女性の手から程遠くなる。

ディーナは部屋を出て階段を下り、一階の食堂へ行った。

日が暮れるとたちまち酒場と化すが、昼間のうちは平穩な食堂だ。

椅子に座り、野菜や豆がふんだんに入ったスープをすする。硬いパンをかじる。

給仕の女が、今日のスープは美味しいわよ、と言っていた。

だが、美味しさを感じない。

そもそも食欲が無い。

ただただ義務的に食べる。

そんな彼女に、一人の男が近づいて来た。

漆黒の髪に、漆黒の瞳。

一見するとやや痩身のように見えるが、それなりに筋肉が付いており、背も高く、引き締まった体型の持ち主である。

ハンサムと言っても良いが、野生的な荒々しさのほうが目立ち、貴公子然とした要素は全く感じられない。

彼は片手にワインの瓶を持ち、ディーナの向かいの椅子に腰を下ろして、行儀悪く足を組んだ。

「夜襲が成功したってのに、シケたツラしてんなア」

彼女は男を一瞥し、彼の言葉に答えずにスープを飲んだ。

そして、ぼそりと口を開いた。

「朝からワインを飲んでいるの？ ほどほどにしないと潰れるわよ」

「ワインは水代わりだ。この国の水は飲めたもんじゃねえ。故郷の水が一番ってやつさ。お前もそう思うだろ？」

「さあ…… 故郷の水が美味しかったかどうかなんて、もう覚えていないわ」

彼女の冷めた口調に驚いた様子もなく、男はワインを豪快に飲んだ。

「この国の水はイカれてるぜ。地下から汲んでるんだか、川から汲んでるんだか知らねえけどよ」

「あなたには帰る国がある。でも、私には無い。滅んだ国の水の美味しさなんて、思い出しても意味が

無いわ。今いる場所の水で満足なのよ」

「そんなに簡単に忘れられるもんかあ？俺はこの国に来たことを既に後悔してるぜ。今すぐ帰りてえくらいだ」

「祖国を愛しているのね」

ディーナは少しだけ笑って、パンをちぎりながら言った。

「そんな大袈裟なもんじゃねえ。“住めば都”って言葉が信じられねえの。俺らの国だって、いつ滅ぶかわかったもんじゃねえしよ」

男はテーブルに肘を付き、ディーナのほうへ顔を近づけ、囁いた。

「上の奴らは、夜襲が上手くいったんで狂喜乱舞してる。敵さんが撤退するだろうと思ってる。」

だが、そんなに上手く事が運ぶと思うか？奴らが大人しく国に帰ってきてくれると思うか？」

「きつとまた攻めてくるわ。それも死兵と化して。国の威信がかかっているのよ。彼らはこのケーテコッドを落とすまで諦めない」

「この国のお偉いさん方は馬鹿ばかりだが、ありがたいことに我らが総司令官殿は唯一まともだ。」

なんとか策を練ってくれればいいがな」

「ハーベックは分かっていると思う。彼は良識家だし。……大体、あの川を渡るのそんなに難しくもないのよ。」

急流ってわけじゃないし、ただ川幅が広いだけ。彼らは近いうちに

また来るわ」

「総力戦なんて言われたら俺はもうトンスラするぜ。そこまでやってられっかよ」

「情けない男。この大陸に逃げ場所なんてあるのかしら？」

「ビビってるわけじゃねえよ。めんどくせえ事はしたくねえだけ」

「呆れるわね」

デイナーは無表情のまま言葉を返し、スープをかき混ぜた。

まだ飲み終われないことに対して、ため息が出そうになる。

男は行儀悪くワインをラッパ飲みしていたが、窓のほうを見ると、急に体を硬直させた。

「やべえ、シギだ！」

彼は慌てて立ち上がり、食堂の裏口へ行くこうとする。

「何をしたの？」

デイナーは眉をひそめた。

「話してる暇はねえ。またな！」

彼はそそくさと食堂の奥へ消えた。

と同時に、表口から二人の男が入って来る。

一人は壮年であり、もう一人は若者であった。

「今までここにピアーズが居ただろう。お前と話していた」

壮年の男が言った。それは質問ではなく、確認。

「ええ、話していたわ。食事をしているところに彼が来たの」

ディーナは男を見上げた。

茶色い髪に、草原を思わせる緑の瞳。

だが、左目は潰れている。

額から頬まで縦に付いた剣創が痛々しい。

「私には話してくれなかったんだけど、彼は何をしたのかしら？」

「俺らのワインを掠めやがった。今や貴重な、ユドウス産のワインをな」

ユドウスは彼らの祖国である。否、祖国であった。

彼らもまた、ディーナと同じく帰る国を持たない人間である。

「それは……褒められたことではないわね」

ディーナは内心呆れた。

相手が激怒すると分かりきっている物を盗んでくることもないだろうに。

しかも、その相手が手強いということも分かりきっているのに。

「彼は裏口から出て行ったと思うわ。追いかけるなら今のうちよ。もつとも、瓶の中身は空になっているかもしれないけれど」

「追いかける気はねえ。今度会ったら落とし前をつけてやる」

壮年の男　シギは、一緒にいる若者に去るように手振りで指示し、先程までピアーズが座っていた椅子に腰を下ろした。

「夜襲、ご苦労だったな」

「ええ、本当に。あんな経験はできればしたくないものね」

「イチかバチかってやつは誰でもやりたくねえもんさ」

シギは給仕を呼び、ビールを一杯注文した。

ディーナは少しずつスープをすすする。

「奴ら、また攻めて来るでしょうね？」

「ああ、おそらく援軍を呼んでな。ハーベックは奴らをヘラルザント平原で迎え撃つつもりらしい」

「ヘラルザント平原……」

「今度は“ガチ”だ。そこでしくじったら、この国も殺られる」

シギは右目に鋭い光をたたえてディーナを見た。

彼の顔は精悍で、草原で生きてきた男の力強さを感じさせる。

「奴らも相当躍起になっている。厳しい戦いになるだろうな」

「勝てる見込みはどれくらい？」

「さあな。俺にも分からんよ。直接ハーベックに聞いてみな」

給仕がビールを運んで来たので、シギはそれを受け取り、豪快に飲んだ。

「ところで、お前の相棒はどうした？」

ディーナは思わず木製のスプーンをぎゅっと握る。

「……帰って来てから会ってないわ」

「珍しいな。お前らはいつも一緒なのに」

「夜襲で疲れてたし。部屋で休んでいるんじゃないかしら」

「何かあったような雰囲気だな。え？」

シギはにやりと笑った。

ディーナのわずかに怒気を含んだ口調に感づいたのだ。

「何も」

「前から聞いたかったんだが、あいつはお前の男か？」

「ただの幼馴染みよ。それ以上でもそれ以下でもないわ」

「ふん、なるほど」

彼は信じていない様子だったが、ディーナは黙って無視する。

「だが、同郷の唯一の幼馴染みだろ？」

「そうだけど、恋人ってわけじゃない」

ディーナはスプーンを置いて席を立った。

もはや食べる気がしない。

「失礼するわ」

「おい、スープが残ってるぞ」

「食欲が無いのよ」

「いつメシが食えなくなるかも分からねえ世の中だぞ」

「分かってるけど、とにかく今は食べたくないのよ。また会いまし

よ」

彼女はシギを置いて食堂を出た。

連合編 第一部 第三章

ケーテコツドの街路を歩く。

人がごった返していて、気分が悪くなりそうだ。

ディーナの故郷ではあり得ない光景だった。

人の間を縫って、厩舎へ向かった。

厩舎はこの街の西側にある。

彼女は中へ足を踏み入れて、そこにいた馬丁に声をかけた。

「おはよう、ヴォル。ヘイクは来てる？」

ヴォルと呼ばれた馬丁の若者は、戦場から帰って来た馬の世話をしていたが、

ディーナの声を聞くと手を止めて振り返った。

「おはようございます、ディーナさん。今日も暑いですね。来てますよ、ヘイクさん。」

丘で羊を放しています。助かりますよ、本当に。

俺らは馬の世話で手一杯ですから」

「ありがとう。また羊と戯れているのね」

ディーナはヴォルにお礼を言うと、厩舎を出て、近くの丘へ向かった。

丘を登ると、ヘイクの姿が見えた。

言われた通り、そして予想通り、羊の大群の中で世話をしていた。

ディーナに気付くと、彼は立ち上がり、笑顔を彼女に向けた。

そこそこハンサムな顔立ちの彼は、ケーテコッドの女たちの間では気になる存在らしいが、

幼い頃からの付き合いであるディーナには、そんなことは関係ない。

「やあ、ディーナ。休んでいると思ってたよ」

ディーナはヘイクの近くへ行き、彼を睨んだ。

羊が側でむしゃむしゃと草を食んでいる。

「……………どうしてあの時、矢を放ったの？」

彼女が聞きたかったのは、この一点のみであった。夜襲の時のあの一瞬の出来事。

「どうしてって、君を助けたかったから」

「私は一人でも倒せたわ。なのに」

「いや、君には倒せなかった。倒せる相手じゃなかった。だから俺は弓を引いたんだ」

ヘイクはディーナの言葉を遮って言った。彼には珍しく、少し鋭い口調で。

「あの夜襲の目的は、名を上げるとか、武勲を立てるとか、そういう事じゃなかった。」

あくまでも敵を川向こうまで撤退させるためで、功を急ぐ必要なんてなかったんだよ」

「功を立てたいなんて思っていなかったわ。私はただ、自分の腕を試したかっただけよ」

「それは危険な考えだよ、ディーナ。ましてや、君は女性で」

“女性”という一言が、ディーナをかつとさせた。

「なぜ女だからって攻撃を自粛しなければいけないのよ？」

私は誓った、あなたたち男と同じ戦士になるって。

だから今まで傭兵として必死にやってきたわ。そして、これからも必死にやっていく。

それこそ命尽きるまで。なのに、どうしてあの時戦わせてくれなかったのよ？」

「君には勝てない相手だった。どう見てもね。君は押されていた」

「押されてなんか……………」

「君はあのままじゃきつと殺されていた。俺は君に生きて欲しいから、矢を放ったんだ」

「……………いつからそんなに正確な洞察ができるようになったのよ？」

「戦いに身を投じていれば、自然とそうなるもんさ」

ヘイクは微笑み、肩をすくめた。仕方ない事だと言うように。

「だから俺はこの丘で羊の世話をしている。昔の、あのつましい生活を思い出して、

郷愁に浸っているってわけなのさ」

彼は暇さえあれば、いつも羊たちの世話をしている。

ひとたび戦場に出れば、何度となく正確に矢を放って、敵を即死させる凄腕の弓兵であるのに、

普段はこんなふうに動物を可愛がり、彼らの面倒を見る。

彼はそんな心優しい青年であった。

「……………」

ディーナはヘイクが羊のもこもこした毛を撫でているのを見た。

そう言えば、そろそろ毛刈りの時期ではなかったか？

この羊は今年生まれた奴で、母親が育児放棄してしまって、お乳も飲めずに危険な状態だった。

でも、今はこんなに立派に、他の羊たちと同じように育ってる。

最初は俺たち人間の手が必要だったわけだけど、こうやって新しい、若々しい命が育まれていくのは、素晴らしい事だと思わない？」

彼はその羊を撫でながら、彼女に微笑んだ。

「……………矛盾してるじゃないの」

ディーナは周りの羊たちを見回し、ぼそりと言った。

「あなたはこうやって羊や牛を可愛がっているけれど、戦場に出ればたくさん人間を殺している。

彼らにだって命がある。

人間は殺しても良いけど、動物は例外だって言うの？」

「そうだね。矛盾してる。分かってるよ」

ヘイクは困ったような顔をして、静かなため息をついた。

「人間は本当に愚かしい。つまらない理由で争って、殺し合い、大地を汚す。」

「ただ、動物は純粹で、穢れなき存在だ。彼らは何も罪を犯さない。だから俺はこうやって、動物たちに赦してもらった。」

「こうすることで、彼らが生きていけるなら。一種の心の浄化。」

「……気休めだけどね」

「あなたは本当に優しいのね。昔から、変わってない」

「ディーナは少女の頃のような笑顔になった。」

「……助けくれてありがとう」

「……どういたしまして」

「ヘイクも微笑み、彼女と握手をした。」

「昔はそうではなかったのに、彼の手は、男らしいごつごつした手になっていた。」

「街に戻るわ。ピアーズのことが少し心配」

「ピアーズ？どうかしたの？」

「ユドウスのワインを掠めたのよ。シギが怒っているわ」

「それはそれは……」

ヘイクはピアーズの顔を思い出すような表情になった後、肩をすくめた。

「俺はまだこの丘にいるよ。何かあったら、またここに来て」

「分かったわ。それじゃ」

ディーナはヘイクと別れ、丘を下った。

来た時と同じように、馬丁のヴォルに一言声をかけ、厩舎を後にする。

連合編 第一部 第四章

デイナーは来た道を戻り、再び市街へと入って行った。

相変わらず、ごった返している人々。何度歩いても慣れない。

ケーテコツドの住人、行商人、デイナーと同じ剣を携えた兵士たち。

様々な人々が行き交っている。

ケーテコツドは帝国の帝都オルトリアに次ぐ大都市である。

都会には自然と人が集まってくるものである。

中央広場へ行くにつれて、いつそう人が多くなり始めた。

広場で何かが行われているらしい。

デイナーは特に興味があるわけでもなかったが、

人のかき分け、前のほうへ進んだ。

「我々は祖国の自由を守らねばならない！」

年老いてはいるが、張りのある声が中央広場に響き渡った。

デイナーは演説らしきことをしているこの老人を見知っている。

シルファン国王ヴェルティースだ。

普段はこんな所に出てくるはずはないのに、と彼女は違和感を感じた。

「悪しき帝国はすぐそこまで迫っている。」

昨夜、勇敢なる兵士諸君の健闘で敵を川向こうまで撃退したが、依然として予断を許さぬ状況だ。

是非とも、シルファン王国の民　　いや、この国に終結した全ての者たちの力が必要なのだ。

悪しき帝国を倒そう！我々は自由の民なのだ！」

ヴェルティース王の傍らには、王以上に見知っている人物が立っていた。

シルファン王国軍　　いや、四ヶ国連合軍総司令官ミュリエル・ハーベックだ。

「帝国の魔の手を退けよう！我々は決して帝国には屈せぬ！」

王がいつそう声を張り上げた。

すると、誰が指示したわけでもないのに、誰かが叫んだ。

「シルファン万歳！！連合軍万歳！！」

その言葉は、瞬く間に周囲へ広がった。

拳を天へ向かって振り上げ、皆が叫んだ。

その呪文のような言葉は、中央広場全体に波及し、響き渡る。

シルファン万歳！！連合軍万歳！！悪しき帝国を倒せ！！」

熱狂の渦が皆を巻き込んでいる　　ディーナはそう感じた。

彼女は拳を振り上げもせず、叫びもせず、ただそこに立っていた。

恐ろしい盲目の集団の中にいると思った。

吐き気を感じる　　扇動されている民衆に。扇動している国王に。

彼女がごくりと唾を飲み込んだ時、凄まじい喧騒の中で、

誰かがぼそりとつぶやいたのが耳に入ってきた。

そのつぶやきはむしろ囁きに近かったかもしれないが、

ディーナの耳には確かに聞こえたのだった。

「愚かな。戦は更なる犠牲と憎しみと、また新たなる戦しか生み出さないというのに……………」

隣を見ると、旅人のような身なりをした青年が、険しい表情で立っていた。

ディーナと同じく、拳を振り上げていない。

彼の隣にはフードを被った女性が、同じように佇んでいた。

体型から女性と分かっただけで、顔は見えない。

青年がディーナに気付いた。焦げ茶色の瞳が彼女を見つめる。

「聞かれちまったかな？気にしないでくれ。通りがかった旅人の戯言だ」

彼は喧騒の中で、ディーナにだけ聞こえる声で言った。

「戯言なんて、そんなことは……」

「いや、忘れてくれ。こういう事を他人に聞かれるのは危険なんですね」

彼は肩をすくめると、女性を連れて立ち去った。

見たところ、傍らの女性は盲目であるようだった。

「……………」

奇妙な二人組が人混みの中に消えると、ディーナは再び正面を見た。

国王が民衆に応えて手を振っている。

その隣には、ミュリエル・ハーベックがまるで兵士の人形のように、微動だにせずに立っている。

彼の金髪だけが、風に吹かれて揺れていた。

ディーナは中央広場から離れた。

とても耐えられるような場ではないと思った。

ディーナは昨日から寝ていないので、疲れを感じていたが、

中央広場から歩き続け、ケーテコツドの南東方向にある一軒の宿屋へ向かった。

<雄鹿の洞窟>という宿屋で、雄鹿の姿が彫られた木の看板が掲げられている。

彼女はその看板を一目見ると、扉を開け、中へ足を踏み入れた。

宿屋の中は予想通り混み合い、騒々しかった。

多くの宿屋と同様に一階は食堂になっており、常に人で満たされている。

昼間から酒を飲む者や、食事を摂る者が絶えないのだ。

彼女は食堂を見回すと、奥のほうのテーブルに座っている男女を見つけた。

ブーツに付いた泥を少し落としてから、人混みの間を縫い、彼らに歩み寄る。

「よう、ディーナ」

そこに居たのはピアーズであった。

椅子にだらりと腰かけ、テーブルの上に足を乗せている。

ディーナはその行儀の悪さに一瞬顔をしかめ、彼の顔を見て、更に顔をしかめた。

彼の左頬が見事に腫れていたのである。

「どうしたのよ、その頬？」

「シギにやられたんだよ。あいつ本気で殴りやがった」

ピアーズは左頬を押さえながら言った。

「裏口から逃げたけど、その後中央広場近くでばったり出くわしてな。」

俺も殴ってやったけど、あいつのほうが上手だった」

「ユドウス産のワインなんか盗まなければ、こんな事にはならなかったのに」

「飲んでみたかったんだよ。最高級だっというユドウス産のワインを。」

ああ、痛え。口の中が切れちゃった。血が止まんねえ」

「で、どうだったの、ワインの味は？」

「俺の舌では違いが分からなかった」

ピアーズのその言葉に、ディーナは肩をすくめた。

最初から盗まなければ良かったのに、と思ったが、口には出さない。

「何だい、ディーナ、夜襲から帰って来てからピアーズと会っていたのかい？」

ピアーズの向かい側に座っている女性が口を開いた。

ピアーズと同じく、漆黒の髪に漆黒の瞳。

取り立てて美人ではないが、何か内側から輝くものがある、そんな女性である。

ディーナは彼女のその言葉にからかいの微粒子が含まれているのを察し、慌てて言った。

「食事を摂っていたところに彼が来たのよ。シギがやって来るまで、少し話をしただけよ」

「朝っぱらから密会でもしてたのかと思ったよ」

密会と聞いて、ディーナは更に慌てた。自分は何もやましい事はし

ていないのに。

「密会だなんて失礼ね。そんなんじゃないわ」

「分かってる。分かってるって。あんたはヘイクが好きなんだものねえ？」

「違うわよ。彼はただの幼馴染みよ!」

「誰もそう思っていないよ」

「ただの幼馴染みだって言ってるでしょう!」

ディーナは声を荒げた。

すると、食堂にいる者たち全員がディーナを見た。

給仕までが、びっくりして彼女を見つめている。

思った以上に声が大きくなってしまったらしかった。

「何むきになってるんだい。まあ、座りなよ。ビールはどう?」

黒髪の女性　チェリスは、自分の隣の椅子を動かして、ディーナに席をすすめた。

ディーナは顔を赤くしていたが、チェリスの言う通りに椅子に腰かけた。

「ビールですって? いらないわ。私は朝から飲んだりしない」

ピアーズとチェリスはすでに何杯か飲んでいたらしかった。空になったジヨッキがテーブルに置かれている。

「まあ落ち着けよ。俺らは確かに密会なんてしてない。ちよつとばかり真面目な話をしていたただけだよな？」

ピアーズは少し肩をすくめ、ディーナに言った。

「そうよ。今度の戦いについて話していたのよ」

「今度の戦い、ねえ」

チェリスは頬杖をつき、ビールを豪快に飲んだ。

「それより、中央広場を見た？ 凄いことになっているわ」

ディーナは無理やり話題を変えた。

もうヘイクとのことについて触れて欲しくなかったからだ。

「ああ、見てきたぜ。何だありゃ？ 王様が出張ってくれば、兵士が増えて簡単に勝てるんでも思っているのか？」

ピアーズは呆れ顔で言い、給仕を呼んで更にビールを注文した。

「民衆つてのは単純だからね。ああやって扇動されれば、

何も考えずに兵士募集事務所に駆け込むんだろっね」

チエリスの言葉に、ディーナは頷いた。

「資質に欠ける兵士が増える一方だわ」

昨夜の夜襲をはじめ、このところ破竹の勢いで戦いに勝利してはいるが、

無分別と言ってもいい程に新兵を募集し、

その結果兵士の質の低下という問題が起きているのは、見逃せぬ事実であった。

「ハーベックは何を考えているのかしら」

「ハーベックの案じゃねえかもしれねえぜ。

他のお偉いさん方とはうまくいってねえって、専らの噂だ」

「つまり、他の將軍たちが国王を使って民衆を扇動しているってこと?」

「たぶんな。王様なんてお飾りに過ぎねえからな」

ディーナはヴェルティース王の傍らに立っていたミュリエル・ハーベックを思い出した。

そう言えば、複雑な表情をしていなかったか？

三人の間に少し重苦しい空気が流れたところに、一人の男が近づいて来た。

堂々たる体躯の持ち主で、腰に剣を携えている。

茶色い髪に少し白いものが混じっているが、

年齢よりも若く見える程、活力に満ち溢れている。

彼はきびきびとした歩調でやって来て、ディーナに向かって言った。

「やはり、ここにいたか」

「グラール將軍」

モーリット・グラール將軍　ディーナの上司に当たる人物である。

南西の国ルーフェンスの出身で、事実上、総司令官ミュリエル・ハーベックの片腕を務めている。

一將軍に過ぎないが、軍をまとめ得る能力を持った男だ。

ディーナはこのグラール將軍が指揮する特別な傭兵部隊に所属しており、

目を掛けてもらっているのである。

「何かご用でしょうか、將軍？」

「これから作戦会議を始める。来たるべき戦いへ向けてのな。

こんな所で油を売っている暇はないぞ」

グラール將軍は、テーブルに置いてある何個もの空のジョッキを見て、顔をしかめた。

「午前中から飲んだくれていたとはな。まったく、たるんでいる」

「私は飲んでいません。飲んでいるのはこの二人です」

デイナーは慌てて言った。將軍に勘違いされたくない。

「素面ですから、これから作戦会議に出ても問題ありません」

「それなら良いが。……しかし、ピアーズとチェリス、お前たちはいつもたるみ過ぎだ。

連合軍兵士としての自覚が足りん。ハルトウ將軍がぼやいているぞ」

グラール將軍は、ピアーズとチェリスの上司の名を上げた。

だが、この上司の名は、彼ら二人にとっては何の効果も生み出さなかった。

「ハルトウか。あいつは度量が小さ過ぎですよ。ヴェネザー王国援軍総司令官なんて、胸を張ってますがね」

ピアーズは鼻を鳴らし、ビールを大量に飲む。

口の中が切れていると言っていたが、大丈夫なのだろうか、とディーナは少し心配になった。

「そうそう。あいつ全然駄目なのよ。將軍、何とか言ってやって下さいよ」

チエリスもピアーズに賛同した。

しかし、グラール將軍は真面目くさって二人に注意する。

「上官を敬え。ハルトウ將軍はヴェネザー王国の代表として健闘していらっしやるのだぞ。」

お前たちも上官を見習ってはどつだ」

「健闘っていうか、孤軍奮闘って感じですけどね。」

ま、俺たちはやる時はやりますよ、ご心配なく」

ピアーズはにやりとして、將軍に言った。

「とりあえず、私はこのへんでお暇するわ。それじゃ」

ディーナは席を立ち、二人に別れを告げた。

グラール將軍の後について、宿屋を出る。

「ところで、ヘイクはどこにいる？」

グラール將軍は早足で歩きながら、ディーナに訊ねた。

彼の姿を見ると、周りの人々が自然と道を開けていく。

「西の丘にいます。私、呼んできますから」

「うむ。半刻後に作戦会議を始める。呼んだらすぐに城へ来い。」

時間を無駄にするな」

「分かりました」

ディーナは再び、ハイクがいるケーテコッドの西側へ向かった。

夏の太陽がきらきらと輝き、彼女の長く茶色い髪を照らしていた。

連合編 第一部 第五章

デイナーやヘイクが所属する傭兵部隊は、四ヶ国連合軍という軍隊の中でも、特別扱いされている。

戦う能力に優れた、特に“場慣れ”した傭兵たちを集めているという点も一つの要因であるが、

それ以上に、彼らの指揮官であるモーリット・グラール将軍が、

シルファン国王ヴェルティースに気に入られており、

更に彼が総司令官ミュリエル・ハーベックの片腕を務めていることが、

傭兵たちの地位を高めているのである。

グラール将軍は、傭兵たちにとって憧れの存在と言っても良い。

彼は母国ルーフェンスでも「将軍」という肩書きを持っていたが、政変に巻き込まれ、

不本意ながら母国を離れ、流浪の後、ここシルファンへやって来た。

彼の卓越した能力は、政争に明け暮れている母国よりもむしろ、

巨大な帝国と血みどろの争いを繰り広げているシルファンで発揮され、

更に磨きがかかり、ヴェルティース王やミュリエル・ハーベックを唸らせたのである。

金銭で動く傭兵たちでさえも、グラール將軍には従い、全幅の信頼を寄せているのだ。

とは言え、彼は権力を笠に着て、無理な命令を出したりしているわけではない。

彼はきちんと目上であるヴェルティース王やハーベックの命令に従い、それを忠実に実行する。

そのような態度が、彼の評価をいつそう高めているのだ。

彼ら傭兵部隊は、その特別扱いされていることによって、

シルファンの城の中をある程度は自由に歩くことができた。

国王や王妃の寝所など、プライベートな場所以外は。

名だたる將軍たちを除いて、他の部隊の兵士たちには許されていないことである。

そのようなわけで、ディーナとヘイクは作戦会議が終わった後、城の廊下を歩いていた。

早く外に出たいが、城の廊下は複雑で、

何度も右に曲がったり左に曲がったりしなければならぬ。

侵入者を防ぐためであるが、それにしてももう少し出やすくして
くれないかと、

ディーナなどは思ってしまう。

やっと出入り口に近づいたところで、

彼らは総司令官ミュリエル・ハーベックに出くわした。

いつもは部下たちを引き連れているのだが、今は一人である。

ディーナとヘイクは一礼して、通り過ぎようとしたが、

ハーベックのほうに彼らに声をかけてきた。

「聞いているぞ。昨夜の戦いでも活躍したそうだな」

ハーベックはハンサムな青年である。

美しい金髪に、人好きのする青い瞳。

誰が見ても、ハンサムだと思わずにはいられない。

あまり男性に興味がないディーナでさえも、

彼女の祖国には金髪に青い瞳の男性などいなかったということもあり、美しいと思っている。

彼は今でこそ四ヶ国同盟軍総司令官という役職に就いているが、

元々はシルファン東部の貴族であるらしい。

城で行われる舞踏会などでは、花形であったに違いない。

「いえ、そんな……活躍というほどでは……」

ヘイクが恐縮して答えた。

「何を言う。君ほどの弓兵は敵にも味方にも見当たらないぞ。」

君の豪弓はもはや神がかっているな」

「……………恐れ入ります」

ヘイクは自分の弓の腕を褒められて嬉しいと思っただけではない。

ディーナはヘイクの内心を知っているので、複雑な気持ちになった。

彼がひとたび弓を引き、矢が放たれば、それは一人の人間が死ぬということだから。

「君も女性なのに素晴らしい活躍をしているな。全軍の男たちに、

爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ」

“女性なのに”という言葉が引っかかったが、ディーナは目を伏せてハーベックに言った。

「ありがとうございます。今後も男性の皆さん方に見劣りしないように、努力します」

何と言っても、男性優位の組織である。こう言う他なかった。

「ところで、君たちはどこの国の出身だったかな？」

いきなりの質問に、ヘイクは少し首を傾げて答える。

「シエリフアードですが……」

「そうか、シエリフアードか。帝国によって随分むごい仕打ちを受けたと聞いている。

気の毒だったな」

「俺たちがシエリフアード人だということ、何か不都合があるのですか？」

「いや、そういう意味ではない。シエリフアード人にはなかなかどうして逸材が多いのでな。

そのような辛い体験が、反骨精神を生んでいるのかと思ったのだ」

「反骨精神なんてものじゃありません。俺たちを動かしているのは、自らの身を燃やす程の深い憎しみです。帝国への、憎しみです」

「私たちは家を焼かれ、家族を殺され、国を滅ぼされました。

私たちには帰るべき国がもはやありません。

だから、絶対に、帝国を倒したいんです。

奴らに私たちと同じ思いをさせてやりたいんです」

ディーナは顔を上げ、ハーベックの青い瞳をしっかりと見据えて言った。

思い出しただけで、腸が煮えくり返るようだった。

「……すまない。辛い過去を思い出させてしまったようだ。

君たちの思いは充分伝わった。今後も四ヶ国同盟軍のために健闘してくれ」

ハーベックはすまなさそうに、そして優しげにディーナとヘイクを見つめた。

と、そこへ、一人の兵士が彼らの側にやって来た。

「閣下！国王陛下がお呼びです！」

その一声を聞くと、ハーベックは厳しい表情になった。

「分かった。すぐに行く。 それでは、また会おう」

彼は短くこう言うと、颯爽と城の中へ消えて行った。

ディーナとヘイクは彼に一礼する。

ディーナはハーベックに、先程の中央広場での国王の扇動について

訊ねれば良かったと思った。

他の將軍たちが国王を使って民衆を扇動しているのか、と。

だが、たとえ訊ねたとしても、ハーベックが答えてくれないだろうことは、明白であった。

連合編 第一部 第六章

帝国軍への夜襲が行われた日から数日後、シルファンの城に一組の男女がやって来た。

なんと、国王に謁見したいというのである。

普段、城に出入りする者は將軍たちをはじめとする高位の軍人、貴族、高官といった、

限られた人々だけである。

一般の民が城にやって来るのは、かなり珍しい。

四ヶ国連合軍総司令官ミュリエル・ハーベックが部下からその報告を受けた時、

彼は顔をしかめた。

このような拳国一致体制下で、何かとせわしないというのに、

謁見を申し出るとは一体どんな用件であろう。

彼は不審に思いながら、ヴェルティース王が御座す謁見の間へ足を向けた。

その一組の男女は、すでに謁見の間にやって来ていた。

ヴェルティース王の前で片膝をつき、頭を垂れている。

ハーベックは瞬時にその男女を観察した。

二人とも旅人のような格好である。

いかにも流浪してきたといった感じで、かなりみすばらしい。

男のほうは、焦げ茶色の髪。

横顔を見る限りでは鼻が高く、眉目秀麗と言ってもいい。

女のほうは 国王の前だというのに、フードを被っている。

全く顔が見えず、得体の知れない雰囲気だ。

「遅くなりまして、申し訳ございません、陛下」

ハーベックはヴェルティース王の前で男女と同じように片膝をつ
き、

うやうやしく頭を下げた。

「打ち合わせが長引きまして……」

「おお、ハーベック、来たか。良い、良い。時間はたっぷりある
のだからな」

国王は機嫌が良いらしく、ハーベックに他の將軍たちと共に並ぶ
ように、手振りで指示した。

ハーベックは一礼し、立ち上がって、筆頭の位置に並ぶ。

「さて、何やら余に言いたい事があるそうだな？旅人の若者よ」

男は若者というよりもむしろ青年であったが、

老人の国王から見れば若者ということになるのだろう。

許可が下りていなかったが、彼は頭を上げ、焦げ茶色の瞳でヴェルティース王を見据えた。

「はい、是非とも陛下に具申したい事がございます」

彼はうやうやしく口を開いた。

「申してみよ」

「恐れ入ります。まず、自己紹介をさせて下さい。

私はエハス・ナルディマと申します。こちらはスニヴァ」

男はこう名乗り、傍らの女性も紹介した。

「ヴェルティース王が玉座で頼杖をつく。

「珍しい名だな。どこの国から来た？」

「私どもははるか遠く、キルディアから参りました」

キルディアは大陸の一番東に位置する小国であった。

現在は帝国に征服され、“キルディア地方”と呼ばれている。

シルファン王国から見れば、キルディアには大きな街道が通じていないということもあり、

最も遠い地域である。

「キルディアか。帝国に征服されて久しいが、そなたらも流浪の民というところか？」

「はい、陛下。我々は母国から逃れた後、北方地域を旅して参りました」

「さぞかし大変であつただろう。北方地域と言えば、

シエリファードが帝国の魔の手に落ちている。

このシルファンまで辿り着くのは至難の業であつたはずだ」

「ご明察、恐れ入ります」

「ところで、なぜその女はフードを被り、顔を見せぬのだ？
礼を失しているとは思わぬのか？」

少し腹を立てているようなヴェルティース王の言い草を察して、

エハスと名乗った男は深々と頭を下げた。

「申し訳ございません。礼を失っているのは充分に心得ております。」

ですが、この女には深い事情がございまして……」

「何だ？申してみよ」

「スニヴァ」

エハスが女の名前を呼ぶと、女は頭を上げ、フードを静かに、恐る恐る取った。

謁見の間にいる全ての者が、はっと息を呑んだ。

唸るような声を洩らした者もいる。

彼女の顔には痛々しい傷があった。

右のこめかみから左のこめかみにかけて、深い剣創が走っていたのである。

目は完全に潰れ、彼女の美しかったであろう顔を恐ろしいものにしていった。

「なんと………」

ヴェルティース王はそれだけ言うと、言葉を失った。

「このような訳でございます。彼女はキルディアのとある貴族の令嬢でした。」

しかし、帝国がキルディアに攻め入って来た際に、帝国の兵士たちによって犯され、

この傷を付けられたのです」

「お見苦しいものをお見せ致しました。わたくしは生き恥を晒す身。

どうかこれ以上の事は訊ねないで下さいまし」

女 スニヴァが初めて口を開いた。か細い声だ。

「……う、うむ。で、そなたがここへ来た目的は何なのだ、若者よ？」

国王は姿勢を正し、エハスに訊ねた。

エハスは胸に手を当て、うやうやしく言う。

「実は、私どもの目的はスニヴァのこの傷と無関係ではございません。

ご承知のとおり、私どもは帝国によって滅ぼされました。何の抵抗もできぬまま。

復讐することもできぬまま、長い年月が流れました。

しかし今、その時が来たのです。私どもが帝国に復讐する時が。

私は、恋人であるスニヴァを助けられなかったことを悔やんでいます。

どうしても、彼女の仇を討ちたいのです」

「いまいち話が見えんな。そなたは一体、余に何を望んでいるのだ？」

「私に、四ヶ国連合軍の兵士全員を預けていただきたく存じます」

「何だと？」

「私に、軍師としての職を与えていただきたいのです。」

將軍方を補佐し、的確な戦略、戦術で四ヶ国連合軍を必ずや勝利に導いてみせます」

將軍たちが色めき立った。エハスを注視している。

ヴェルティース王は唸り、スニヴァの傷を見た時と同じように言葉を失った。

「どうかお願い致します。今の四ヶ国連合軍であれば、

私の戦略、戦術で、帝国軍に勝利することが可能です」

「……し、しかし……」

「陛下！このような輩に騙されてはいけません！

こんな、どこの馬の骨とも分からない輩に軍師の職を与えるなど、狂気の沙汰です！

現場も知らず、経験も無い輩に権限を与えるべきではありません
「！」

語気を強めて、国王に進言した者がいた。

ユドウス傭兵軍総司令官　シギ・ファルビアである。

彼は右目に鋭い光をたたえて、エハスを睨んだ。

「経験ならございます、將軍閣下。私は母国キルディアで短い期間ではございましたが、

軍師を務めておりました。結局、帝国に敗戦しましたが、その時の苦い経験は、

今でも忘れられず、来たるべき戦いに必ずや生かせるでしょう」

「軍師を務めていただと？ユドウスはキルディアの隣国だったが、貴様のような名前は聞いたことがない」

「十年も前の話です。覚えている者は少ないでしょう」

「シギの言うとおりです、陛下。戦は、民衆が興じるような賭け事とは訳が違います。」

シルファンの　いや、四ヶ国連合の存亡がかかっております。

かつて軍師だったとは言え、我々の事情を知らない者に全権を委ねるのは、

いささか危険すぎます」

今度はハーベックが口を開いた。

整った顔立ちに、緊張の色が見て取れる。

「確かに、二人の言うとおりだが……」

ヴェルティース王は落ち着きなく目を動かしていた。

エハスとシギ、そしてハーベックの顔を代わる代わる見る。

「それでは、ごうしましょう。次の戦いで、私を軍師として働かせて下さい。

もし私の戦略や戦術によって帝国に勝利できれば、そのまま私を雇っていただく。

負けた場合には、私どもはこの国を去ります」

エハスの提案に、ハーベックは硬い声で言った。

「……勝てる自信はあるのか？」

「あります。この十年間、戦略と戦術を研究してきましたから」

明快な答えであった。エハスの焦げ茶色の瞳が、ハーベックの碧眼を見据える。

「大した自信だな」

シギが鼻を鳴らす。

すると、エハスは来たるべき戦いに用いる予定の戦略、戦術を簡単に説明した。

それを聞いて、国王は一人頷いた。

「……分かった。次の戦いで腕前を見せてもらおう。」

もし四ヶ国連合が勝利した場合には、そなたを軍師として厚く遇することを約束する」

「陛下！！」

シギとハーベックが揃って声を荒げた。

他の將軍たちはまるで彫像のように固まっただけで、何も言わない。

「面白い男だ。少し試してみても良からう」

「しかし陛下、次の戦いは極めて厳しい戦いに」

「何も言っな、ハーベック。もう決めたことだ」

「ありがとうございます、国王陛下。誠心誠意、軍師を務めさせ

ていただきます」

エハスは深々と頭を下げた。

ハーベックはもはや何も言えなかった。シギも同様だ。

腹立たしげに、エハスを見据える。

ヴェルティース王は一同に解散を指示した。

將軍たちが次々と自らの部署へ戻って行く。

エハスとスニヴァは彼らがいなくなるまで頭を下げ、微動だにせずになっていた。

しかし、エハスは唇の端だけを吊り上げ、密かに笑みを洩らしていた。

その笑みを見た者は誰もいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912y/>

澎湃

2011年12月4日01時54分発行